# 橘家は女系家族

虹色猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
橘家は女系家族

【Ｎコード】
Ｎ０７９７ＢＡ

【作者名】
虹色猫

【あらすじ】
たいしてイケメンでもないのに５人の姉妹に振りまかれる主人公の日常を描いた話。
この作品は、半分の後悔と少しの勇気でできています。残り？知らんよそんなの。
※第１話書きなおしました。

## 人物設定（前書き）

なんか書いてしまった…！
何をしているんだ自分！
ま、まあとりあえず開いてくれた方、ありがとうございます。
文才ないですがよろしくお願いします。

光の口調変更しました。

# 人物設定

橘裕子（たちばなゆうこ）

橘家の母。変態変人で、誰もその言動を理解できない。
６人もの子供を立て続けに産んだ凄い人。
本人いわく、「安産だったから大丈夫？」
キレると怖い…らしい
見た目は美人…見た目はね

橘万里（たちばなばんり）

橘家の父。仕事で世界中を飛び回っており、基本家にいないが、帰ってくるといつもへんなお土産を買ってくる。
正直みんないらない。なにげにハンサムで子供思い。

橘圭（たちばなけい）

この物語の主人公。橘家の長男で兄妹の中で唯一の男。おバカ。
自分以外の家族がみんな美形なのでちょっと引け目を感じている、私立奏星学園高等部の１年生。
橘を音読みして名前の前に「かん」をつけたら「かんきつけい」になるので、かんきつけいと呼ばれている。
ありきたりだが、隠れイケメンだったりもする。黒髪黒目の短髪。サッカー部に所属している。
鈍感だったり鋭かったり。勉強はあまり得意ではない。

橘奏（たちばなかなで）

橘家の長女で、高等部の３年生で生徒会長。
文武両道眉目秀麗のいわゆるパーフェクトな人。ドＳな一面あり。
圭を愛している。
黒髪黒目の長髪美人。生徒会長っぽい雰囲気を醸し出している。

ファンクラブがあったりなかったり。
剣道部に所属していたが、今は引退。腕前は全国級
圭の呼び方は「圭」

橘由希（たちばなゆき）
次女で、高等部の2年生。
姉と同じ黒髪黒目の長髪美人。
茶道部に所属しており、その姿は誰もを魅了する。（↑本人談
圭を愛してやまない人。実は変態。
圭の呼び方は「ケイくん」
勉強はできるみたいだ。

橘蛍（たちばなほたる）
三女で、中等部の3年生。
茶髪でブラウンの瞳でこちらもまた長髪。姉とは違い美人というよりも可愛い系。
料理を得意とし、料理部に所属している。
家族でいちばん料理がうまい。
圭の呼び方は「お兄ちゃん」
理想の妹像。運動が苦手。

橘光（たちばなひかり）
四女で、中等部の2年生
茶髪で黒目のボブ。
バスケ部に所属しており、活発な美少女。
圭の呼び方は「圭兄」

橘彩香（たちばなあやか）
五女で、中等部の1年生
黒髪でブラウンの瞳の長髪。普段は髪をポニーテールにしている。

弓道部に所属。可憐な美少女。
圭の呼び方は「兄さん」

ストーリー展開によってどんどん増えていきます。

## 人物設定（後書き）

基本橘家の女は美形となっております。
主人公くんは知りませんが（笑）

## はじまり

ところで君たち。
奏星学園の橘一家はご存じだろうか？

奏星学園の橘一家と言えば、

長女は容姿端麗文武両道、おまけに生徒会長

次女は次女で容姿端麗文武両道？

三女は三女で可愛い癒し系

四女は四女で容姿端麗運動神経抜群のバスケ部のエース

五女は五女で容姿端麗文武両道で奏の再来といわれている

そんなびっくりするぐらいハイレベルな橘一家には、兄妹の中で唯一の男がいた。
そんな誰もが羨む立ち位置にいる彼は、苦悩な日々を送っていた…

この話は、そんな彼の日常を描いた物語である。

## はじまり（後書き）

書いていて思いました。
ああ、なんてありきたりなんだろう、と。
でも、いいんです。
書いてしまったのだから。

## 第1話：父、来る（前書き）

なんか変だったので大幅に書きなおしました。

## 第1話：父、来る

「おしっこ！」

「しるか！！！」

やっと出番が来たと思ったら……第一声がこれかよ！
なんなんだこの小説！最初からしてすでに残念だ…

「ねぇけいちゃん、なんでみ〇もんたってみ〇もんたっていうの？
最初見たとき、みの虫かと思っちゃったわお母さん」

「それはね・・・ってどうでもいいわ！いいから早く着替えてこいよ母さん！」

「は～い……あちょー！」

…なんか変なポーズ取りながら出ていったぞ。大丈夫かなあの人？
早くも将来が不安だ。俺は介護なんてしたくないぞ！！

そんないつもどおりの朝を迎えた今日は、ちょっと特別な日だった。
なぜなら今日は親父が帰ってくる日でもあり、変なお土産を持って帰ってくる日でもあるからだ。

正直嫌だ。お土産なんていいからさっさとどっかへ行ってくれていい。

ピ～ンポ～ン

そんなことを考えていたら、インターホンが鳴った。

「母さ～ん、出てー」

「は～い……『はい。柑橘系のきつと書いて橘です』」

……その説明要らなくね？

『お？母さんか？俺だ、万里だ。開けてくれ～』

『は～い。今開けますよ～』「けいちゃ～ん、鍵開けてきてー」

「はいよー」

俺はテキトーに返事をして玄関に向かう

靴を履いて鍵を開けたそこには、大量のお土産を抱え、サングラスをかけた変な人がいた。

## 第1話：父、来る（後書き）

なんかものすごく変な話になりそうな気がしてならない今日この頃
大丈夫かなこの小説…
文才なくてすみません
たぶん連載続けてるうちにマシになってくると思いますので、なにとぞご理解とご協力をお願いいたします。

まあとりあえず書いちゃったので頑張ります。

## 第2話：恐怖のお土産

「親父……なに、これ」

「お兄ちゃん……それ、やめておいた方がいいよ。なんか……吐きそう」

「そうね圭。これだけはホントにやめておいた方がいいと思うわ」

「圭くん、それなんかゴムの匂いするよ……？」

「兄さん、それはだめだよ……ゼッタイ！」

「圭兄、そもそもこれなんなんだ？食べれるのか？」

俺たちは今、謎の黒い物体を前に、困惑していた。

◆◇◆

そもそも事の発端は、親父がまた変なお土産を買ってきたということだった。

親父の建前、喜んだふりをしないといけない俺たちは、喜びながらお土産の封を開けていった。今思えば、それがすべての原因だったのだと思う。　そして俺たちは、開けてしまった。

……パンドラの箱を。

そこからは、今思い出しても悪夢の連続だった……

◆◇◆

「で、親父、これはなんなんだ？」

「ん？ああそれか。一応お菓子らしいぞ。ちなみに結構売れてた」

「「「「「「お菓子ぃ！！！！？？？？」」」」」」

（……ってか売れてたのかよ！！！）

そんな俺の叫びは届かずに、会話は続行された。

「うん、お菓子。てかそんなに気になるんだったら誰か食べてみれば？」

「え！？わ、私は食べたくないなぁ……なんて」

「私も食べたくないわ」

「私も嫌だなあ」

「わ、私も……」

「あたしも嫌かな」

……

なぜかみんながこっちを向いた。

え？俺？いやいやいや！無理無理無理！

絶対食べたくないこんなの！

死んでもヤだね！！

すると奏姉が

「圭、男でしょ？フフ」

続いて由希姉まで

「死なないでね……グスッ」

俺食べること決定かよ！！

さらに光まで

「圭兄！男の意地を見せてやれ！！」
えー。意地って言ってもな……
さらにさらに彩香まで
「兄さんが食べてくれるとうれしいなあ」
くっ！上目遣いとか…！可愛い！
さらにさらにさらにあの優しい蛍まで
「お兄ちゃんは…食べて…くれるよね？」
グハッ！！そ、そんな目で見つめられたら、お兄ちゃん断れない……
「クッ、わ、分かったよ。食べるよ食べるからさ。その……
万が一の時はよろしく」
「ん。分かったわ」
「死なないでね……」
「任せといてお兄ちゃん！」
「大丈夫なの？」
「さすが圭兄！」
「よしっ！やってやる！」

俺は、恐る恐る手を伸ばした。
グニッとした気持ち悪い感触が掌を伝い、俺は今すぐ手を離したい気持ちになったが、姉や妹がこちらをじっと見つめてくるためそう簡単には離せない。背中や掌が嫌な汗で湿ってくる。俺は怖くなって目を閉じた。そしてだんだんと物体を口に近付けていき……

その物体を口に含んだ。

直後俺の意識は刈り取られた。

◆◇◆

その後・・・蛍の部屋で

「うへぇ……ゲッソリ」

「大丈夫？お兄ちゃん」

「あんまり。もう二度と食べたくないよあんなの……」

「どんな感じだったの？」

「なんかこうグニッとしてて味もなんか気持ち悪くてさ…なんかこうもうホントにゴム…っていうかタイヤ食ってるような感じ？」

「うわぁ…お兄ちゃんよくそんなの食べられたね」

「自分でもそう思うよ」

「でもまだいっぱい残ってるよあれ…どうするの？」

「しょうがない…親父がまた行ったらみんなでこっそり捨てよう。」

「そうだね。どうせだれも食べないしね。」

「うん。てかよく親父確かめもしないであんなの買ってきたよなあ。もうホントに勘弁してほしいよ…（泣」

「お父さんには言わないの？もうお土産はいらないって」

「う～ん…なんだかんだいって親父には世話になってるし、お土産ぐらいは貰っておかないとなんか親父が不憫に思えてきてさ・・・」

「ふ～ん。優しいんだねお兄ちゃんは」

「そうか？でもまあ一応家族だし…当然だよ」

「そういうところもますますお兄ちゃんらしいね♪」

「あ、あんまり俺をおちょくらないでくれよ……？たのむから」

「ふふふ。は～い」

「分かればよろしい分かれば」

## 第2話：恐怖のお土産（後書き）

ちなみにこのお土産、実在します。
私の母が某国へ旅行に行ったときにお土産で買ってきたのですが、
見た目や触り心地は、文章中そのままです。
父は食べた瞬間即効トイレへ駆け込んでゲロゲロしてました。
私はこのとき、どれだけ日本のお菓子が美味しくてありがたいものかを実感しました。

日本に生れて、良かった～！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0797ba/

---

橘家は女系家族

2012年1月15日00時49分発行